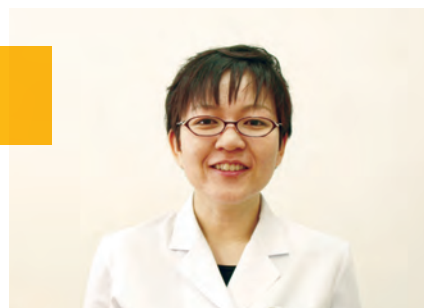


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第23回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



終末期は、あるときから経口が難しくなる。水分が取れなくなる。食事が進まなくなる。今まで内服できていた薬が飲めなくなる。患者さんと家族が症状の進行を実感させられる瞬間だ。

患者さんをなんとか起こし、「これを飲まないともっと悪くなるよ」と説得して、毎回、薬を飲ませるのがたいへん。あるいは努力して飲ませようとするが、どうしても飲めずに言い争いになってしまった、どうしよう、といった相談が家族からしばしばある。

私は、「どうしても体に入りたい薬は、内服薬ではなく、坐薬や注射にもできる。けんかしなくても大丈夫」と説明し、家族の緊張をほぐせればと願いながら簡易懸濁法などを含め、剤形変更や投与経路変更を検討、提案する。

以前、オピオイドの持続皮下注と内服で長期在宅療養をしていたある男性患者宅に週2回、流量制御のポンプの交換のためにお邪魔していた。とても開放的なご家庭で、玄関の上がりがまちには、朝、にわとりが生んだ卵が置いてあり、近所の人が勝手に入っては、自分の家の作物と物々交換して帰るようなお宅だ。家族は、訪問する私たちに手編みの帽子をつくってくれたり、ひな祭りにはちらし寿司をごちそうしてくれたり——。いつの間にか、私も患者さんを「お父さん」、介護している妻を「お母さん」と呼んでいた。

穏やかな療養期間の果てに、あるときから患者さんの食事の量が少しずつ落ち始め、見守る妻は気丈に振る舞っていたが、やはり目には憂いの色が深くなっていった。ある日、患者さんがうとうとしている枕元で

妻と私は話をしていた。「今日もな、朝の薬を1粒ずつ口に運ぶけどなかなか口を開けなくてな、がんばれと言うのだけど……」。「お母さん、お父さんは十分がんばっているから、今よりがんばれというのはしんどい。いちばん大事な薬は注射で体に流れているからあまり無理にすすめなくて大丈夫」。

声が聞こえたのか、患者さんが覚醒し、私を見た。私は、「お父さん、薬を飲むのがしんどいかねえ。どうしてもダメなときは1回飛ばしてもいいように調節しておくし、なるべく飲みやすい薬に変えるからね。だからお母さんと、けんかしなくていいからね」と伝えた。すると患者さんは、こう返してきた。「飲みたいんよ。わしも。でもな、それでもな。それでも飲めんときはな……」。

言葉が見つからないようだった。文章でうまく伝えられる自信がないが、おそらく、もう生命維持が自分にできない段階なのかを私に尋ねようかやめようか、逡巡されたのだと思う。「お父さんがしんどくないように薬を持ってくる。笑顔ですごす時間を増やすために薬を選んでくるからね」。私はそう声をかけたが、患者さんはそれには答えず、天井を見ていた。

以来、私の頭の中には、「それでもな。それでも飲めんときはな……」と話した患者さんの声音がずっと残っている。薬は、生を助け、老病死から遠ざけるもの。希望を与えるもの。では、亡くなる直前に使う薬は、必要か、無駄か。薬を諦めることが、生きる希望を消すことにつながるようには働きたくない。そんなことを考えさせる声音だ。